

「山から、話をつけてこなあかん」。舞台に使う木の話となると、木澤善和さんの口ぶりが少し変わった。市場へ行けばいつでも買えるという世界ではないとのことだ。どこそこの神木が倒れたと聞けば、その一本を訪ねていく。木を探すとは、そういう仕事だという。

十年ほど前、舞台の修復の話が一度持ち上がったことがある。そのとき木澤工務店の故会長は、青森の下北半島まで木を買いに行っている。ヒバ。水に強い木だ。長いものは十五メートルあった。

だが、当時の諸般の事情により、修復の話は頓挫した。木は丸太のまま、十年を待つことになる。「sonだけ長いとね、全部が腐らんでも、ポコポコ」。傷んだところが出る板を、舞台に張るわけにはいかない。ヒバは、諦めた。十年分の段取りが、一度そこで消えた。

今回、床には総ヒノキを使う。「聞こえのええのは木曽檜やわな」。年輪の細かく詰まった木ほど、狂いが少なく、長くもつ。取材の間、木澤さんは何度も木の断面を指さした。数えきれないほどの細い輪が、そこに刻まれている。

木には、赤身と白太がある。中心の赤い部分と、外側の白い部分だ。白太は水を吸い上げて育つぶん、雨に当

第四回

「二百年の木を待つ」

阿賀神社（太郎坊宮）登録有形文化財修復委員会

たると腐りが早い。だから雨のかかるところは芯材だけを使う。「三十センチの木でも、二十五センチしか取れないということになる」。木は、丸ごとは使えない。そして、舞台を支える柱は樺（ケヤキ）だ。硬く、強い。ただし乾かすと、割れる、歪む。「性根の悪い木もあるんですわ」と木澤さんは笑った。十年余りを寝かせ、もう動かんと見極めてから、ようやく使う。柱の一本にも、それだけの支度が必要。苗木を植えた山なら、使えるようになるまで八十年から百年。人の入らない山の木となると、二百年から二百五十年。舞台に張られる一枚の板の向こうに、それだけの歳月がある。百四十六年前の大工たちも、同じように木を選んだはずだ。土地を見て、風を見て、この木ならもつ、と決める。その目が、あの舞台を今日まで立たせてきた。

二百年かけて育った木が、これから先、人の立つ床になる。その支度が、いま静かに進んでいる。

天狗たちの大普請



まもなく始まる修復を待つ、太郎坊宮の舞台